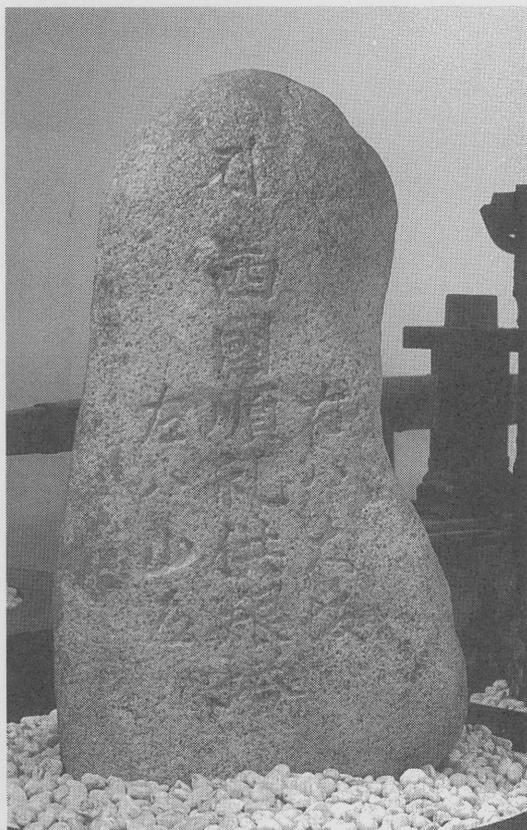


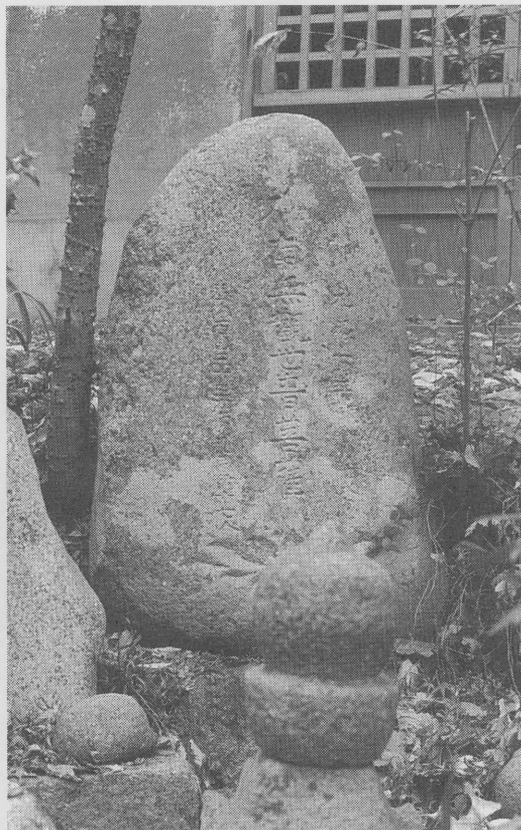
THE NEWSLETTER OF NISHINOMIYA CITY MUSEUM

西宮市立郷土資料館ニュース 第21号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662 電話0798-33-1298



西宮市山口町下山口の道標



西国巡礼供養塔（光明寺）

目次 CONTENTS

西宮市域の西国三十三所巡礼道（井阪康二）…2

最近の資料調査から - 西宮樽廻船問屋の事跡を訪ねて -（西川卓志）…5

寄贈資料一覧…8

西宮市域の西国三十三所巡礼道

井阪康二 (当館館長)

はじめに

西国三十三所巡礼は和歌山県的那智勝浦の青岸渡寺を第1番として、近畿地方一円を巡って第33番岐阜県の谷汲の山にある華嚴寺で終わります。霊場の数33は人々が困難に会ったとき観音菩薩が33種の姿の身に代えて現れ、苦しみから救ってくれるという信仰からきています。

西国三十三所巡礼は平安時代末(12世紀)頃に成立していました。この巡礼の風習が生まれたのは、京都を中心とする観音霊場巡礼の流行と、修行のため修験者が諸国霊場を巡る風潮によるものといわれています。巡礼道は数百里と距離も長く、山、谷、平野、海岸と変化に富んでいます。巡礼の旅は多くの日数と困難をとまないので大変な苦行となります。はじめは苦しい修行をする聖や修験者などの宗教者が巡礼の中心でした。それが15世紀中頃に貴族社会に広まり、一般民衆も参加しはじめました。西国の名称は巡礼者の中に東国の人々が多いところから、この頃より一般化したといわれています。江戸時代に一般民衆の間に西国三十三所巡礼は盛んになり、西国三十三所写しの霊場としての地方霊場が数多くできました。

西国三十三所巡礼者の通った道

西宮市域には西国三十三所巡礼者の通った道が2つあります。

1は第24番中山寺(現宝塚市)より第25番清水寺(現社町)へ行く道と、2は中山寺より兵庫(現神戸市)廻りの道が西宮市域を通っていました。

1は中山寺よりJR福知山線の北側に沿う道を現宝塚川面、惣川を経て、武庫川を渡らずに西宮市域に入り、現西宮市青葉台を通る青野道を通り、塩瀬町木ノ元のところで武庫川を渡ります。木ノ元より塩瀬町名塩、東久保を通り赤坂峠を越え、山口町の平尻、名来を通り、現神戸市北区道場町平田にでます。そして三田市を通り第25番清水寺へと行く道です。この道で名塩より平田までを『筑紫紀行』(江戸時代の旅行記)に次のように書いています。それは「川向ひに平田村。人家五六十軒茶屋宿屋あり。是より山道の石地にて、ことの外行きがたきに、休むべき所もなく甚苦し。かくて爪先上りに二十丁あまりのほり

ゆけば谷川あり。土橋よりわたる。二三丁行けば赤坂村。引つづきて東久保村。此所をすぎて峠にいたれば、大坂の城はるかに見ゆ。それより坂を下りてゆくまに人家あり。よき茶屋宿屋多し。独鈷水という清水宿屋のうらにあり。三十丁計下れば名塩村。」とあります。そして同書は名塩－金岩村（現JR西宮名塩駅より塩瀬中学校あたりか）－木本（現木ノ元）－有馬道追分－生瀬の道を通ったと書いています。この道の有馬道追分より木ノ元までは武庫川の河原を通るので大水のときは通れない難所であったと思われます。青野道はこの道の武庫川をはさんだ対岸にあり、殿様道とも巡礼街道ともいわれて、おそらく通りやすかったのではないかと思います。青野道は「慶長十年撰津国絵図」に細い線で道が書かれています。

2は中山寺より現宝塚市の小浜、武庫川を渡り、石子志、小林、鹿塩を通り、仁川を渡り、現西宮市の段上、神呪、門戸を通り、西国街道に合流して、広田、西宮を通り兵庫（現神戸市）を経て、播磨の第26番一乗寺、第27番円教寺、第25番清水寺へと廻ります。門戸より中山寺までの道を西宮市側にあった村は中山道と呼び、宝塚市側の村は西宮道と呼んでいました。こちらの道は兵庫廻りといわれ、途中に広田社・西宮社・摩耶山・布引の滝・生田社・来迎寺・須磨寺・人丸社・長建寺・尾上住吉社・鶴林寺・石の宝殿・曾根天満宮などの名所旧跡があります。東国からの西国巡礼者は兵庫廻が多かったそうで、名所旧跡巡りもかねていました。中には金比羅山へ詣る巡礼者もありました。

西国三十三所巡礼道の道標

西宮市内には西国三十三所巡礼道の道標はほとんど見かけません。西宮市山口町下山口にある墓地に「西国巡礼供養塔 右は大坂 左は山道 寛政三（1791）亥歳四月十八日 同行九人」の道標がありました。現在は山口町郷土資料館に展示しています。これはおそらく山口町の平尻より道場町平田へ通っている道の分岐点に建っていたものと思われるが、その場所は特定できません。

実は山口町下山口には道標ではありませんが、「西国巡礼供養塔」が同墓地に1基、光明寺（浄土宗）に9基あります。古い年号のものをあげると「元禄七（1694）八月十八日 南無観世音菩薩 奉供養 西国三十三番巡礼 同行十七人」と刻されています。他の巡礼供養塔は元禄11年（1698）3月18日同行11人、宝永4年（1707）6月18日同行12人、享保9年（1724）4月18日同行33人、元文元年（1736）4月18日、延享元年（1744）同行8人、宝暦9年（1759）3月19日のと年号が読めなかったものが2基あります。下山口の墓地には延享元年（1744）4月銘のものがあります。光明寺にあります「西国巡礼供養塔」

は寺に建てられたものと、家にあったものを寺に持ちこまれたものもありますと御住職が話された。江戸時代に下山口は西国三十三所巡礼を廻るのが盛んであったことわかります。

この供養塔を建てた日かと思われますが、18日が多いのはこの日が観音菩薩の縁日だからです。3月と4月が多いのはおそらく農作業が本格的に始まる前に西国三十三所巡礼を廻ったのではないのでしょうか。同行が8人から33人までで10人前後が多く団体で廻っていることからみて西国巡礼のための講があり、何年かに1回は巡礼の旅に出たようでありませう。

これらの供養塔は西国三十三所巡礼を廻り終えたの記念して建てられた石碑と思われます。はじめにのところで述べましたように、西国三十三所巡礼は廻るのに数百里あり、山、谷、平野、海岸などを通るので大変な苦しい旅であったでしょう。

この道標は西国巡礼供養塔ですが、大変な旅のことを思い、巡礼や旅をする人のために建てたものであります。

最後に歩いて西国三十三所巡礼する人はいつごろまであったのでしょうか。塩瀬町名塩の宮脇さださんにそのことをお聞きしました。巡礼する人をお遍路さんとよんでいます。お遍路さんは白い装束に白いかばんを肩からかけていました。お遍路さんが戸口に立つと「お遍路さんきはった、ホウシャ（報謝）しといで」と親にいわれ、お金を1銭か5銭を、気をはる人には10銭を渡した。お遍路さんは柄杓でお金を受けとります。お米の場合は1合杓に米をゲビツ（米びつ）からとってお遍路さんが持っている袋に入れました。ひのき笠に「同行二人」と書いている、「お遍路さん1人やのになぜ2人」と聞くと、父親は「仏さんと二人」ということであると答えました。お遍路さんは六角の高い杖をついてました。4月頃からお遍路さんが多く通った。「昭和14年でも、その時分よく通った」とのお話でした。戦後はなかったとのことでした。

上垣秋雄さん（昭和8年生）、宮脇さださん（大正6生）、光明寺さん、山口町郷土資料館にお世話になりました。ありがとうございました。

（参照文献）

横田健一著 『観音信仰と民俗』 平成2年刊 木耳社

速水侑著 『観音信仰』 昭和50年刊 塙書房

松岡孝彰著 『生瀬の歴史』 昭和32年刊

『西国三十三所巡礼道』 平成3年刊 兵庫県教育委員会

最近の資料調査から－西宮樽廻船問屋の事跡を訪ねて－

西川卓志（当館学芸員）

1. はじめに

西宮市立郷土資料館では、ここ数年来、「西宮と海」に関する資料調査を行っている。なかでも、「西宮漁民の房総方面への出漁」と「樽廻船と酒荷の運搬」というテーマはその中心で、おもに石碑や金石文の探査を続けている。今回、紹介させていただく資料は、「樽廻船と酒荷の運搬」に関するもので、『西宮町誌』（明治16年刊行 大正15年復刊）にある「…大和龍田神社に灯籠を献ず…」という記載をたよって、現地で確認したものである。

2. 大和龍田大社の灯籠

この「龍田神社」に該当する可能性のある神社は、現在奈良県に2箇所ある。生駒郡三郷町「龍田本宮」（龍田大社）と同郡斑鳩町「龍田神社」がそれである。龍田神社（斑鳩町）は天御柱命と国御柱命を祭神とし、本殿両側に竜田比古神社と竜田比売神社をまつ。寺伝では法隆寺の鎮守として竜野から勧請されたという。中世期には法隆寺支配の市として竜田市が盛んになり、その市の神として、寛元元年(1243)夷神が摂津国西宮から龍田神社西側に勧請されている（法隆寺寺要日記）。この点でこの神社も西宮との歴史的な関係がある。この斑鳩町龍田神社を新宮とすれば本宮にあたるのが、三郷町龍田本宮である。

龍田本宮（三郷町）は、旧官幣大社で天御柱命と国御柱命をまつ。この二柱の神は風の神で、その名は天高く巻上がる竜巻の姿を写したものらしい。三郷町竜野の地は大和盆地の西部にあり、西方から強風が吹き込む入口にあたる。もとは、この地に風の神をまつてその災いを逃れ、大和盆地に広がる農地に実りをもたらすことを期待した。中世には一時衰えた時期もあるが、江戸時代には社勢を回復し、現在では農業だけに限らず漁業・航海・航空にたずさわる人々からもひろく風の神として崇敬を集めている。この風の神をたよって航海安全を祈願した者のなかに、樽廻船問屋がいたようである。廻船の航海では暴風の害を避けることもさることながら、廻船をより早く安全に運んでくれることを風の神に期待したのであろうか。この境内地に、『西宮町誌』の記載に該当すると考えられる灯籠が所在する。

灯笼のうち一組は境内大鳥居の両脇にあり、他一基はこの鳥居をくぐった奥、拝殿前階段脇にある。いずれもカコウ岩を用いて築かれ、堅牢な基礎の上にしつらえられている。鳥居脇の2基は保存はきわめて良好である。拝殿前のもは縦方向に大きな亀裂がある。すでにていねいに補修されている。それぞれの常夜燈に刻まれた内容は以下の通りである。

龍田大社永代常夜燈

番号	建立年	祈願内容	奉納者	執次	石工	備考
1	天保三年(1832)	海上安全	江戸廻酒諸荷物積問屋仲間 大坂	今西兵庫	安兵エ(王寺村)	
2	天保三年(1832)	海上安全	江戸廻酒諸荷物積問屋仲間 西宮	今西兵庫	安兵エ(王寺村)	写真
3	天保四年(1833)	海上安全	樽廻船中	今西兵庫		

1、2は、鳥居脇の常夜燈でそれぞれ本殿に向かって右、左側に所在する。

3は、拝殿前階段脇で本殿に向かって左側に所在する。



龍田大社常夜燈

3. 樽廻船問屋の歴史⁽¹⁾

大鳥居脇の灯笼に刻まれている「江戸廻酒諸荷物積問屋仲間」とは、「江戸積諸荷物廻船問屋」「江戸酒積問屋」「酒樽積問屋」などとも呼称されることがある「樽廻船問屋」をさす。

樽廻船とは、おもに江戸時代に活躍した弁財船のひとつで、江戸と大坂・西宮間で酒運搬の専用船として就航した。酒荷は他の諸荷物(荒荷)と同様に、江戸の十組問屋と大坂の江戸買次問屋の間で取引され、当初その輸送は菱垣廻船が担当した。しかし、酒の品質維持の問題やその積み方の特殊性、事故があった場合の海損分担のトラブルなどがあって、享保15年(1730)、菱垣廻船で輸送を行っていた十組問屋から酒問屋が脱退し、あらたに酒荷は樽廻船一方に積んで輸送することになった。これ以後、酒樽専用船としての樽廻船が登場することとなる。樽廻船と菱垣廻船で輸送する荷物の種類を、酒荷とそれ以外に分けて輸送する取り決めとなったが、樽廻船は、原則として積荷が酒荷だけと単純で迅速な運行が可能であったことに加え、余裕がある時にはついでに他の荷物を安い運賃で運び、しだいに菱垣廻船を圧倒していくこととなる。

安永元年(1772)になると、田沼時代の株仲間公認政策を反映し、以前から江戸酒積問屋のあった伝法と西宮を中心に、樽廻船の問屋株が大坂・伝法に8軒、西宮に6軒の株数で公認され、樽廻船問屋仲間が成立する。その後も、樽廻船の積荷仕法違反は続き酒荷以外の荷物を余積みすることが常態化していく。菱垣廻船を差配した酒問屋仲間以外の十組問屋は、この菱垣廻船の退潮傾向に歯止めをかけるべく、消極的ながらいくつか対抗措置を考えた。それらは、おもに菱垣廻船問屋の結集充実を図り、新造されることなく減少し続けた菱垣廻船の数を回復すること、そのいっぽうで、それぞれの廻船に実際積み込まれている積荷慣行の現状を考え、旧来の積荷仕方を崩しながらも確実に菱垣廻船にのみ積み込む積荷を確保しようとするものであった。

このような、まさに菱垣廻船と樽廻船の競争とも見える状況のなか、このたび見学させていただいた龍田神社の常夜燈が奉納された天保期をむかえる。天保期には、下り酒の江戸送りに関連し重要な事柄がいくつか見られる。ひとつは天保4年(1833)の江戸十組問屋による菱垣廻船巻き返し策の断行であり、他は天保12年(1841)の幕府による株仲間の解散である。前者は紀州藩の援助によって樽廻船に雇船されていた紀州日高浦と比井浦の廻船を菱垣廻船として運行することによって菱垣廻船の船数を確保し、いっぽうで両廻船積の積荷の種類を増やすという妥協を図りながらも菱垣廻船でしか輸送が許されない荷物を確保しようとする巧妙なものであった。これは、それまでの菱垣廻船の長期凋落傾向に若干の歯止めをかけることに成功する。しかし、このようななか、株仲間の解散が行われた。その解散は積荷仕法が無効になることを意味し、しばらくは荷主と船主相対で荷積先が決まることになる。この状況のもと、当初よりその運行方法に由来する有利さが今回も樽廻

船にさいわいし、菱垣廻船は駆逐されていく。

株仲間解散後は、江戸積み荷物の輸送の混乱を避ける都合から、あらたに九店仲間が結成され輸送の再組織化が図られるが、これも樽廻船を中心に展開していった。

4. おわりに

このように、樽廻船と菱垣廻船の相克の歴史のなか、天保期は、つねに菱垣廻船の運行を脅かしてきた樽廻船の優位性が決定的になった時期と位置づけることができる。龍田神社常夜燈は天保3年と同4年奉納のものであり、また三重県鳥羽市正福寺山門前常夜燈も天保8年奉納である。いずれも大坂・西宮の樽廻船問屋が連署で奉納したと思われる。しかし、これらの行為が先にまとめた歴史的な背景を踏まえた樽廻船問屋の結束のあらわれか、またその繁栄の余裕からなされたものかどうか不分明ではあるが、いずれの社寺も海上安全にかかわる重要な信仰の場であったことは確実である。それは、『西宮町誌』の先の記述に続く「新酒番船」の記事からもうなずける。番船の勝敗は一箇年間の酒価に大きく影響するため、航海の安全とその好成績を願って、新酒番船出帆後ただちに龍田神社に人をやり神楽を奉納させたい。

西宮から遠く離れた大和の地に、灯籠を奉納したという『西宮町誌』の記述に引かれて現地を調査した。江戸時代、上方・江戸間の物資輸送を支えた樽廻船の活躍をいまに伝える資料としてここに記し、備忘録としたい。

(1) 柚木 学 「下り酒の海上輸送と菱垣廻船・樽廻船」『西宮の歴史』西宮市立郷土資料館紀要 1985

津川正幸 「樽船のことども」『西宮文化』第15号 1968

寄贈資料一覧（平成7年7月～12月、敬称略）

高等小學理科書・高等小學國語書キ方手本第一學年用・尋常小學修身書卷四・初等科音楽三・初等科工作三男子用・數學3第一類（萩原ますみ）、家庭燐寸・自転車用照明・ブリキの玩具・カラン（垣内保）、金泥唐草文様付黒漆塗葉箱・医事道具箱・紋銘入りふるしき（大島明人）、腕時計（雜古秀雄）、千里館画譜卷一版木・千里館画譜卷二版木・古今紀要卷一版木（伊東忠夫）、唐箕・土蔵の柱（田中政雄）、マグワ（青木一弘）

ありがとうございました。

西宮市立郷土資料館ニュース第21号 1997年(平成9年)2月1日発行